

昭和三年
六月八日 淺間山の現狀

長野測候所長 梶 間 百 樹

過去數年間の沈黙を破りて昨秋來屢々噴火したる淺間山の現狀を踏査すべく六月八日朝五時三十分小諸を發して登山の途に就く風弱けれども高層雲全天を覆ひ山頂に噴煙を望むもその量はさほど多からず十時湯の平入口なる火山館に着す、途中予の行に加はり案内の勞を執りたるもの小諸町大池氏淺岳「ホテル」主人藤澤氏火山館主小山氏にして三氏は何れも本年既に數回登山せるものなり。

一、火孔外の模様

藤澤氏は長坂下なる淺岳「ホテル」に於て越冬せし由なるが、その談によれば去る二月二十三日の大噴火に際し降灰は同「ホテル」の稍下方に及びその降下區域内に於ても所により非常に厚薄ありしと云ふ、この火山灰は湯の平以下に於ては既に大方は雨に流され風に吹き拂はれて所々僅かにその痕跡を止むるに過ぎず、又小山氏の談によれば火山館にてはその屋根を貫き屋内に落下せし拳大乃至その三倍大の噴石三個ありその落下せし所は少し許り床を焦し居たりと、その三個の岩石は館主今尙ほ保存せり。湯の平には岩石の落下したるものを多少認めたるもその數は多からず、その中最も大なりしは小諸口

登山道湯の平より主峯に掛らんとする所の道の右側に直徑六米前後の新窪地を作れるものにしてその中に徑一米餘の岩石破片二個許り殘留し附近には徑一米以下の岩片多數散亂し居れり、黒味勝ちたる玻璃質の岩石にして落下の當時は徑二米乃至二米半位はありしならんと思はれる、これより登るに隨ひて山の斜面を轉落せし新しき岩石次第に多くなるも前掛山の北端より西北西に一線を劃しこれを境としてその北方にはこれらの岩石全くなしこの境界線は甚だ明瞭にして殆んど直線をなせり、新に噴出されたる灰砂、岩石は前掛山の西面中腹より頂上の火孔壁の周圍附近までの間に最も多く認められ火孔壁上にはこれら灰砂岩石の積ること一米許の深さに達せるものゝ如し、されば山體が全體として低下せることなしとすれば今年は淺間山の海拔は從來よりも約一米増したることゝなる、但しこの中灰は風水の爲に次第にその量を減ずるものゝ如し、沓掛口登山道には所々火山灰の痕跡を殘せる所ある外從來と變るところなし。

二、火孔内部の状態

火孔内は常に「ゴ〜」と音してその殆んど全面より煙立ち昇るもその勢はさのみ猛烈ならず火孔壁の内側に沿ひて外部の冷氣（此日正午頃の外氣溫度攝氏一〇度内外）常に孔内に流入せり。

この孔壁の内面に沿ひて流入する冷氣流が時々何れかの場所に於てその量を増して孔底に沈下することありこの時はこの空氣塊は透明にして孔内の烟を混入せず次第に孔底に擴がるにより或は孔内の三分

ノ二、或は二分ノ一、稀にその三分ノ二位迄も極めて短時間乍ら孔内の消息を伺ひ得べし。

斯くして一時間餘火孔壁上に立ちて孔内の模様を探りたる結果に依れば小諸口頂上の火孔壁の内底（火孔内の西部）には徑五六十米と思はるゝ深き新孔を生じその底は可なり深きものゝ如く遂に之を望見することを得ず。

孔の中央部は孔底中の臺地をなしその中部は同心圓をなせる數個の罅（或は斷層）により圍繞せられ、これら圓形の罅は段階をなし中央部程地面の陥没して生じたことを示す。

段階の高さは最も高き所にて一米半乃至二米位あらんかと想像せらる。而して附近の孔底には岩石の赤色に灼熱せる部分が不規則なる斑點をなして多數散在する様頗る壯觀なり。

孔底中央部の深さは案内者諸氏の言を綜合するに昨年と格別の變化なきものゝ如し。

東方の孔壁下は稍低下し、北に當る孔底は稍高まれるものゝ如し。

孔内常に「ゴォ〜」と鳴響を發するは多數の小噴氣孔の音が集りて斯く聞ゆるものと考へらる、而して孔内所々に小さき噴烟は認められざるに非ざるもこれらは鳴響の強さに比し何れも無勢力なるが如く見ゆ。